

[宮崎演習林]A. 前年度より引き続きおこなっている 試験調査

汰木, 達郎
九州大学農学部附属演習林 : 助教授

中島, 誠
九州大学農学部附属演習林 : 助手

荒上, 和利
九州大学農学部附属演習林 : 教務員

<https://doi.org/10.15017/1456355>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和44年度, pp. 90-91, 1970. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :



宮崎演習林

A 前年度より引き続きおこなっている試験調査

辻木達郎・中島誠・荒上和利

1. スギ品種の地域的特性に関する研究

昭和42、43年度に引き続き従来品種にあらたに6品種を加えた試験地を設定した。

場 所

21林班、昭和43年度伐採の広葉樹林跡地に昭和45年3月植栽

供試品種

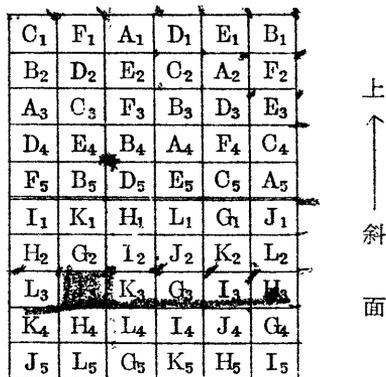
クモトオシ(A)、ヤイチ(B)、オビアカ(C)、ヤブクグリ(D)、メアサ(E)、アヤスギ(F)、

以下新たに加えた品種

キシン(G)、アオシマアラカワ(H)、ヒノデ(I)、イワオ(J)、ウラセバル(K)、アカバ(L)

試験地プロットの配列

下図の通り。



2. 広葉樹肥大生長調査(17・35林班)

広葉樹12種(イヌシデ、ケヤキ、センノキ、ミズメ、ブナ、カナクギ、ミズキ、ヤマザクラ、カエデ、シキミ、ミズナラ、ヒメシヤラ)を昨年に引き続き毎月末調査。

また、44年度から35林班に6樹種(アカシデ、イヌシデ、ミズメ、ブナ、ミズキ、ミズナラ、各3本、計18本)に生長バンドを取りつけ肥大生長の測定をはじめた。

3. スギザイノタマバエに関する研究

(1) 発生調査

冬期に発生をみなかつた成虫も4月下旬から徐々に発生をはじめ6月下旬にはかなりの数をみているが、昨年と比較すると6月下旬の発生数はかなり減少している。また7月に入り成虫が減少するとともに幼虫(蛭)の発生が増加し、8月上旬には最高に達している。この数は昨年よりもかなり多いが、ほぼ同じ傾向である。また9月中旬には成虫が最高に達しているが、この数は昨年の数をはるかに上回っているし、10月に入り成虫の減少とともに幼虫(蛭)が8月上旬のピークとほとんど同じピークを示している点、昨年とはかなり違った結果がでている。このことを雨量、温度、湿度と対比してみたが5年間を通じて、関連性はほとんどみられなかつた。

(2) 防除試験

昨年と同目的、同方法でγ-BHC 撒布効果試験を第1回を5月26日、第2回を7月17日、第3回を9月19日におこなつた。結果は成虫に対してγ-BHC 撒布はかなり効果があるが、幼虫にはほとんど効果をみなかつた。

間伐区においては、成虫数は多く、幼虫が少ないことから、幼虫に対してだけ間伐の効果があられていた。

B 本年度おこなつた試験調査

次木達郎・荒上和利

1. 庇陰格子による試験(構内)

(1) 格子内の微気象測定

植物の生長と光(明るさ)との関係をあきらかにする一手段として庇陰格子による試験がなされているが、これまでは格子内の微気象要因の変動については光要因以外あまり注意がむけられていなかつたきらいがあるため本試験ではとくに庇陰格子内の気温、地温、蒸発量、土蒸発量、空气中湿度をしらべ、庇陰と樹木の生長との関係をあきらかにするための微気象的な基礎資料をうることを目的とした。本年度は夏と冬の2回測定をおこなつた。なお夏の測定結果については日林九支講集第23号に発表している。

(2) モミ種子の発芽試験

天然更新にあつてはとくに樹木の耐陰性が問題になるが完全にウツ閉し、ほぼ単一の樹冠層を構成しているモミ、ツガの天然林でも林床にはかなりの稚樹がみられることからモミ種子の発